

# ルドン「キュクローパス」

## 大津絵「鬼の念仏」

選・元永定正



### 解説

オーディロン・ルドン「キュクローパス」

キャンパス油彩 縦64cm 横51cm  
一九一四年(三) オッテルロー  
クレラー・ミュージーウム国立美術館

ギリシャ神話に登場する二つの巨人、キュクローパスのひとりポリュペーモスはネーレウスの娘たち一番の器量良しといわれた人魚ガラテアに恋をする。だが件の娘はパーシテリアのニンフ、シメーティスの子、牧童のアークスに夢中で、二つの巨人には目もくれない。嫉妬のあまり巨人は岩を美少年に打ち当てて殺してしまう。オウィディウスの『変身譚』ほかに見られるこの逸話は、エトナ火山の噴火の擬人化とされる。

古典主義のブッサンから象徴派のモロー、チェコのクフカへと、この題材を取り上げた画家は多いが、そのなかでルドンの解釈は最も意表を突く。「二つの怪物は、『夢の中で』『起源』といったリトグラフに度々登場した、生命としての眼球に遊ぶ。また岩の窪みに裸体を横たえる女の姿は、母胎なる貝殻から出現するウィーナスの像の変奏だ。地中海の神話的主題に仮託しながら、ルドンはそこにおそらく個人的な象徴を宿らせようとしている。女性はいくつ、至高の告げ人」であり、その前では「操行とか善悪とかの觀念はもはや存在せず、また必要でもない。なぜならそうした神聖な瞬間に心から発するものは、何かしら永遠を含むものだからだ」とルドンは書く。首を傾げたキュクローパスの漆黒の目が宿しているのは、無垢な裸体を前にしての「崇高な不安」と感じか。岩壁に覗く左手の指の仕草も遠慮がちだ。

(稲賀繁美 三重大学文学部助教授)

大津絵「鬼の念仏」

紙本着色 縦60.0cm 横22.7cm  
十八世紀後半 島根県博物館

大津絵は十七世紀中頃から二百年あまりにわたって、東海道は大津宿から京へ向かう街道筋の大谷町、追分町あたりで、旅人相手にみやげ品として売られた絵画である。

二百年を超える歴史を持つ大津絵はそれ自体で時世に応じて画題・内容を変化させていった。はじめは仏画に始まるが、その後、鬼や美女、若衆など多様な主人公が登場させている。大津絵は旅人の往来とともにあった庶民性が豊かで、ユーモアにあふれ、品のあるところが注目される。されば、近代の文人画家富岡鉄斎(一八三六—一九二四)も「大津絵の昔の筆にならえども、及ばぬものは心なりけり」と詠んで、大津絵の精神性の高さを認め、「大津絵は自分の絵の師である」とも記している。

さて、「鬼の念仏」は「藤娘」とならんで大津絵の凶柄では最も有名なものである。とくに「鬼の念仏」は大津絵屋の看板に描かれていたことも知られる。鬼を描いた大津絵には「鬼の三味線弾き」、「鬼の行水」、「雷と天鼓」などもある。眼光する鬼の角を立て、異様な姿は不気味で、恐れられていた鬼も、大津絵では念仏を唱えて勸進し、三味線を弾き、行水をする。そのしなやかな独特のユーモアがある。

大津絵も後半になると道歌を伴うようになり「鬼の念仏」には「慈悲もなき情けも無くて念仏をとなふる人のすがたをとせ」とある。

(石丸正運 滋賀県立近代美術館館長)